

立教大学所蔵 江戸川乱歩旧蔵『若衆物語』（明暦二年板）

——書誌・翻刻・挿絵

安原眞琴

江戸川乱歩が蒐集した和書には貴重書が多い。そのことは、乱歩蔵書が『国書総目録』や『古典籍総合目録』などの目録類に掲載されていたこともあり広く知られていたが、非公開であったため、長きにわたって原本を見ることができない状態にあった。

しかし、二〇〇三年三月に、旧江戸川乱歩邸と乱歩関係の蔵書および乱歩が蒐集した和書を中心とした資料が、立教大学の所有に帰した。それにより、乱歩関係の蔵書（近現代資料）は、二〇〇四年から、旧乱歩邸内に開設された「立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター」において、乱歩邸ともども一般に公開されるに至っている。

和書を中心とした資料も、二〇一二年十月までは新座保存書庫に保管されていたが、同年十一月に立教大学池袋図書館がオープンしたのを機に同図書館に移され、ようやく公開の体制が整った。また、和書に関しては、国文学研究資料館の協力を得て調査・収集も行われており、それも終盤にさしかかっているため、デジタル画像も近年中に公開されると思われる。

本稿では、その乱歩旧蔵和書のうち、明暦三年（一六五七）の

刊行と推定される『若衆物語』を紹介する。池袋図書館で原本を調査したのも、それを発表するのも本稿が最初のものである。『若衆物語』には数本の諸本があり、底本は異なるものなのでに翻刻も備わるが、諸本によって文言に異同があり、加えて該書は孤本と目される稀書なので、ここに紹介することにした。

該書には、『若衆物語』の後に続けて、『西明寺殿百首』という作品も掲載されている。二作品で一冊の一つの作品として制作されたものなのである。本稿では紙幅の都合上、後者の翻刻は割愛したが、挿絵のみは、後者に掲載されているものであっても、前者『若衆物語』に対応するものようであり、かつ非常に興味深い絵様なので、全図掲載した。諸本や挿絵、内容などの検討は、機会をあらためて行いたい。

乱歩は、『若衆物語』の諸本を、該書も含め三本も所持していた。購入や研究の経緯などについては、拙稿「乱歩と和書のかかわり―『若衆物語』を例に」（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター「センター通信」第六号、二〇一二年三月）に記したので参照していただきたいが、概要を簡潔書き風にまとめれば

次のようになる。

一、『若衆物語』は、乱歩の和書蒐集のきっかけとなったといっても過言ではない、乱歩旧蔵和書の中でもきわめて重要な作品である。二、大変に珍しい稀覯本であるにもかかわらず、乱歩は三本もの諸本を入手し、書誌学的な研究にも熱心であった。三、その研究は、過半の諸本を所持してただけに、色あせるどころか現段階で最も詳しく信頼しうるものとなっている。

書誌

〔請求記号〕 911.2/SO27

〔登録番号〕 52072122

〔冊数〕 一冊

〔装訂〕 袋綴

〔表紙〕 後表紙。素紙に紺の朽木形文様。縦一八・七糎×横一三・四糎。

〔見返〕 裏打された厚手の表紙の裏面。

〔題簽〕 なし。左肩に「最明寺殿 百首」と墨書。その右に「若衆物語」と朱書。

〔序題〕 なし

〔目録題〕 なし

〔内題〕 なし。ただし二番目の作品の内題はある。「西明寺殿百首^{しゅ}」(十二丁ウ四行)。

〔尾題〕 なし

〔柱刻〕 双大黒口で上部に「わか」、下部に丁付。中間部分は双

黒格で中央部は空白。

〔匡郭〕 四周単辺。縦一六・七糎×横一二・〇糎。

〔料紙〕 楮紙

〔丁数〕 二十丁

〔丁付〕 第一丁は「二」カ、第二丁は「三」カ(共に擦れて判読不能)。以下「四」〜「廿一」。

〔遊紙〕 なし

〔行数〕 十四行

〔字数〕 一行二十二字前後

〔挿絵〕 十六面。初丁オと最終丁ウの半丁ずつを除き見開き。見開き二面を一図とみなせば七図あり、半丁ずつの二図と併せると全九図となる。以下、丁付ではなく実際の丁数で挿絵の箇所を列記する(カッコで括ったのは見開き図)。一オ、(三ウ、四オ)、(五ウ、六オ)、(八ウ、九オ)、(十ウ、十一オ)、(十三ウ、十四オ)、(十五ウ、十六オ)、(十七ウ、十八オ)、二十ウ。

〔本文〕 漢字平仮名交じり。

〔刊記〕 なし

〔印記〕 「乱」(二丁オ右下方、朱文方印)、「徳田氏家蔵記」(一丁オ「乱」印の下および後表紙中央下方、朱文長方印)、「静岡／土太夫町 佐藤」(表表紙見返部中央右方および後表紙中央左方、朱文長方印)。

〔帙〕 箱帙(現所蔵機関作成)。

〔備考〕

(一) 該書は二種類の作品を収める。第十一丁ウの三行目までが

『若衆物語』で、同丁四行目に「西明寺殿 百首」と内題があり、以下「西明寺殿百首」となる。

(二) 『若衆物語』の本文は、ちょうど冒頭の二丁分を欠く。該書第一丁はもと第二丁で、その前にもう一丁あり、その初丁のオモテ面に本文、ウラ面に挿絵があり、その挿絵と該書一丁オモテ面とで見開きの挿絵になっていたと推定される。該書一丁オモテの挿絵を見ても、右端の人物が切れており、手しか見えないので、もと見開きの挿絵の左側であった可能性が高い。

(三) 古書目録の切り抜きが同梱される。切り抜きには、以下の『若衆物語』翻刻の【挿絵第二図】に該当する挿絵が写真掲載され、「一〇二五 花鳥山桜若衆／西明寺百首 一帙一冊（八一頁参照）」とある。掲載写真と該書の挿絵とは酷似しており同板のごとく見える。その左右に乱歩自筆のメモ書きがある。右に「明暦三年鱗形屋版／大人物絵九枚入」、左に「朝日書店（昭和十二年六月号）」と万年筆書。また左端に同筆で「之は本書の後の別板也」と朱書。「本書」とは乱歩旧蔵の丹緑本（登録番号52072182）のことと推測される。

(四) 該書について、乱歩自筆の資料購入記録たる「和本カード」に、明暦三年板の『若衆物語』を「辰巳や」から六〇〇〇円 で昭和二四年四月三日に購入したと記される。

(五) 後表紙に「静陵／徳田」と墨書。

翻刻

凡例

一、挿絵には通し番号を付した。一丁オモテ面と最終丁ウラ面の挿絵はそれぞれ一図とし、その他は見開きなので見開きで一図と数えた。

一、丁移りの箇所と挿絵に付した丁数は、丁付ではなく実際の丁数である。

一、擦れて読みにくい文字などには□を付して（カスレ）或は（…カ）と記した。

一、読みやすさをはかって読点と改行を施し、旧字を新字に改めた以外は、句点も含め底本のまま翻刻した。

【挿絵第一図】（一丁オモ）

かみあひ。おや、ほうすのうへいひて。物しかくゝをしへねは。手のがらぬもたうり也（やカ）と。我とわか身にりをつけて。親にあひたる時ばかり。おとなしげなるふりをして。かげにてかはる心こそ。さもつらにく、おもはるれ。

かくてはせめて四五年も。寺のすまひするならば。すこししるしも付へきに。三年さへもくらしかね。程なく里へ引こみて。ち、は、こめてすいがいに。やうじつかはすかみゆはず。手足あらはすつめきらす。むさくゝとしてあらし子の子共あつめてくみあひて。あしにものはく事もなく。糸のこにはとりおひまはし。小たかみ、つく四十から。し、めす、めさいとりを。さすもにははぬ

大が[㊦](カスレ)な。つかをはながくこしらへて。ひうちぶくろのを、見れば。山とりのおのしたりおの。ながくしくもふり上げて。さけ(げカ)をなか(二丁ウ)よりおりかへし。くりかたもとにまきこめて。はかまのおびをゆるくしめ。前へたらりとさしこぼし。かみこたうふくうちはをり。こびんうしろにとりまはし。さらはさいくそりもせで。さかやきをみればなつの野、。あしのことくにしげらせて。色よき小袖かさねきて。人のゑもんのなんいひて。世にき、なれぬゑほしなを。われとさいく付かへて。人のけんくわのさやもちて。人こといひて身はしらで。ゆさんしける道にては。こうたくせまひあとさきの。とめはづあはぬうたひをは。しどろもとろにうたひなし。きけんよげなるたかわらひ。よその見るめも思はるれ。

さて[㊧]又よ(カスレ)そへよぶ時は。よきおりふしはいでもせて。時分うつしてたびくくに。つかひをえてもひねくりて、たま[㊨]く(カスレ)きてたにも。あれへこれへとしやうずれ[㊩](カスレ)。た、みの(カスレ)(二丁オ)へりにはひ付て。手をとりの人の引時は。そばのはしらにしかみつき。立あからぬもけしからぬ。やうくさしきになをり。はしをとるより程もなく大くつろきにくつろひで。あたりの人のしるさいを。きやくしんなしにこひとりて。心のま、にうおとりの。ほねかみならしはをとたかくくふ時は。らうにやく共に見くるし、。かくて中酒になりぬれば。すんのひたるさかつきに。二つも三つも酒うけて。中酒すきてのいひのゆをしるにてうめてこぶめかし。ちやのこいづれのようにやなく。こぶ一きれを其ま、に。口へおしこみかみながら。とはずかたりをしいたして。物いふこゑはき、にくし。ち

やのこみなくとりくひて。ようにもた、ぬかきのさね。くるみのかわをとりあつめ。むかひの人になげつけて。かなたこなたへなげまはし。おとなしき人の有ぬれば。さ(二丁ウ)しきもいまだ過ぎるに。みんぎんかほに立ざりて。友たち共をよびたて、人のこさしきこべやへも。あんないなしにおし入て。刀わきさ(ぎカ)しぬきすて、。こばんおし板まくらとし。わけなき口をた、きつ、。人の刀をづばとぬき。きれんきれじのめき、して。をのが刀の物きる、。けいづをいふてりこうして。あたりのみ、をは、からす。でんぶざうたんしいたして。はたさぬこゑはこがまし。それのみならずあまつさへ。女おとこの物かたり。皆くちくしいだして。思ひ入たるさうたんに。我身の上をわすれば。さいくしけきたかわらひ。人にきかせん用もなし。

此色々のなかばより。すでにあそびもはじまりぬ。ばくちの事は中々に。さたのかきりの事なれば。筆にかくへきやうもなし。さすがごしやうぎすく六は。じんじやうわざの事な(三三丁オ)

【挿絵第二図】(二丁ウ・四丁オ)

これは。あるひは手を見、手を見せじ。あるひは石のあらそひに。おそろしげなるこゑをして。ふしや白山八まんと。事もかけぬにせいもんし。石つきちらしざうごんし。たか(ガカ)ひにはらをたてへくは。あそびをしてもむやく也。しやうぎのばんにむかひては。時のきやうしやといひながら。やがてことばをつめあひて。さんのてをはりはらをたて。はやし、めかしからかひて。はんませ人につめられて。ことはもんだうす。まじめになりて何事も。わうといひて立ざりぬ。これらはせめて十二三。一四五ほと(ドカ)のわか衆たち。おさな心の有ければ。ゆるす所も有ぬへし。

是にましたるおとな共。よきいけんをはいひもせて(でカ)。けつく色ふしそやしたて。二人の若衆す、めつ、。いさかひさせてわらふこそ。かへすくもりよぐわ(はカ)ひ(四丁ウ)なれ。か、るおとこのしたてには。すごろくばんに取むかひ。刀きつはにをしまはし。石たてさいをとるよりも。はやにくていにりこうして。石のさし引あらけなく。ずいにまかせて石ばしり。たがひに心一六に。ちがふさいのめあらそひて。でつくともせぬくびのほね。でうろくすんにぬきあげて。はやいさかひをしさうなる。是かやくにん夏のむし。火に入よりもあやうきに。しらけといわ(はカ)ぬ人ぞなき。かくてばんかずうちかさね。かちたる時はきげんよく。まけたる時ははらをたて。とがなきさいをなげめぐり。ゆみや八まんうつまじと。こしの刀をぬきかけて。かねはたぐくとうつ時は。物くるはしくすさまじや。

此あそび共すえになり。日もせきやうになりゆけは。さかづきすへてぎをつくり。しゆゑん(五丁オ)

【挿絵第三圖】(五丁ウ・六丁オ)

のざにもなりぬれは。たうせいはやるらつふにも心をかけてならはねは。つゝ、みたいこをうつゝ、にも。ゆめにもしらてうたひをは。しほからこゑにたてふしを。へうしはつれにとくをそく。しどろもどろにうたひなし。さらはないしよに有もせて。人よりことにさし出て。きやくしんなしに人々に。うちとけて申さんためにたふるとて。大さかつきにさしうけて。人の物をはむさほ(ばカ)りて、くがいのぎりはかけはて、。ふせうのものにこめられて。うちへふくれてどんにして。ゑこなるかたへりこんにて。りひをもしらてねばくちに。ふるき小そでのあつわたを。み、をさ、え

てうつみきて。としににあはぬわたぼうし。まゆのうへまで引かけて。人によりあふざしきにて。うちとけてかたる時。ことばのうち(六丁ウ)ほねませて。き、しれいをもき、わけす。人は心のまんまるに。身なりしあはせしとやかに。心ことばにかどもなく。さすがおとこのたましひは。はつきとしたる人をこそ。おくゆかしくも思はるれ。心の中は夏の日に。てらせてにはたまりける。水よりもぬるくして。うへのおもてはずさまじや。まなこのかども見くるし、。

かくて月日もす、きのかど、あけぬくれぬとする程に。さすかにのふのつきたさに。弓まりれんがひやうほうに。心をすこしかけおびの。むすぶれんがの月なみの。人数になりておりくくの。くわいのざしきにつらなりて。七十四あるもじを。袖の下にてかぞへかね。ながくみじかく句をつくり。心にそまぬけいこして。しだいぐにくたひれて。れんがはさらになりがたし。弓のけいこをはし(七丁オ)めんど。ししやうをよびてならふ時。おしにかつてのたうつくり。むねはらこしのつめやうを。五旦三日ならへ共。是も程なくくたひれて。ししやうをやがてをしかへし。後にはくれといでははず。又有時のと(どカ)かなるはるのゆふへのくれがたに。まりのけいこをはじめんと。ふと心に思ひ出し。よるひるわかす其にはに。やなぎさくらにまつかいで。四ほんか、りをこしらへて。花やかならぬしりつまけ。身なりあしふみつめひらき。じぶんたぶんをわきまへず。は(ばカ)ひそくおほくする程に。あひてに人のきらひけり、まりもあがらぬ物ぞとて。又うちすて、にはには草をしけらせて。まりはかしこになけすて、。わらべ子共にふまれつ、。むなしく成てはてにけり。扱ひやうほ

うに取かゝり。小太刀かまほこ十文字、やり」(七丁ウ)なぎなたに木かたなを。其いろくこしらへて。よるひるわかずがためきて。あるひは手かず二つ三つ。あるひは五つ六つ七つところまだらにつかひなし。是もなかばに打すて、はての一つも覚へすし。万ののふのならさるは。心のとげぬゆへそかし。かくて月日をつもりつゝ、あまたの子共そだて、も。たゞいたづらにそたつれば。身をも家をももちさげて。しつ山がつにことならず。

あなあさましやおなじくは。人となりての思ひてに。春はかすみにたなびかれ。その、うくひすのきの梅。おのえのさくらあをやぎの。糸に心をうちへて。程なくくれて行春の。夏は卯の花の。雪めづらしくあらね共。ぬのをさらすかことく也。はしのものとせうびは。夏に入てそひらきける。日かけをまつやあさがほの。露のめぐみもあ」(八丁オ)

【挿絵第四図】(八丁ウ・九丁オ)

はれなり。たそかれ時にあらね共。なはゆふかほの花しろく。にはのたち花うちかほり。むかしの人を思ひ出。こひしき袖のうつりがに。山ほとゝぎす。一こゑは。物思へとやすたくらん。つゝ、じ色々いはまより。花さくさわのかきつばた。にごりにしまぬはちすはの。花のいろくさきみちて。ひかりをかざしとぶほたる。おぎのうははをそよくと。かたへすしき風のをと。あきもちかしとしられけり。いろづく山の見へわたり。はなにおとらぬもみぢばの。露のしづくは世の中の。をくれさきたつためしかや。うすむらさきのふぢばかま。きつゝ、なれにしむしのねも。うちみだれたる糸すゝき。はたをるむしのねをたて、夏をしのぶやまつむしの。こゑふりたつるすゝむしの。」(九丁ウ)ながきよさむ

を我ひとり。いたくわぶるはきりくす。物あはれなるゆふぐれを。などとふ人のなかるらん。はつかりがねの一つらは。そらたのめなるふみとかや。さだめなき世のならひとや。

うつろひやすきしらきくの。霜をいた、くおきな草。さかりなる身も行末の。おとろへはつる有さまは。草木の上にもしられたり。月によなくうそふきて。つまこふしかのなみたをも。袖にやとして冬は又。霜雪あられのさゆるよの。ねやのこからしき、あかし。なくやちとりもこほり江に。なみにうきねのをしかもめ。あはれをかけてわかき時。心すなほにじんじやうに。あひくとしてにくげなく。人のいひよる折ふしは。たとひ心にあはず共。もらさぬやうにあひしらひ。た、何となくかどもなく。かきと、めたる水くきの。うちをきがたくあらんこそ。見るに」(十丁オ)

【挿絵第五図】(十丁ウ・十一丁オ)

かたちもまずべけれ。

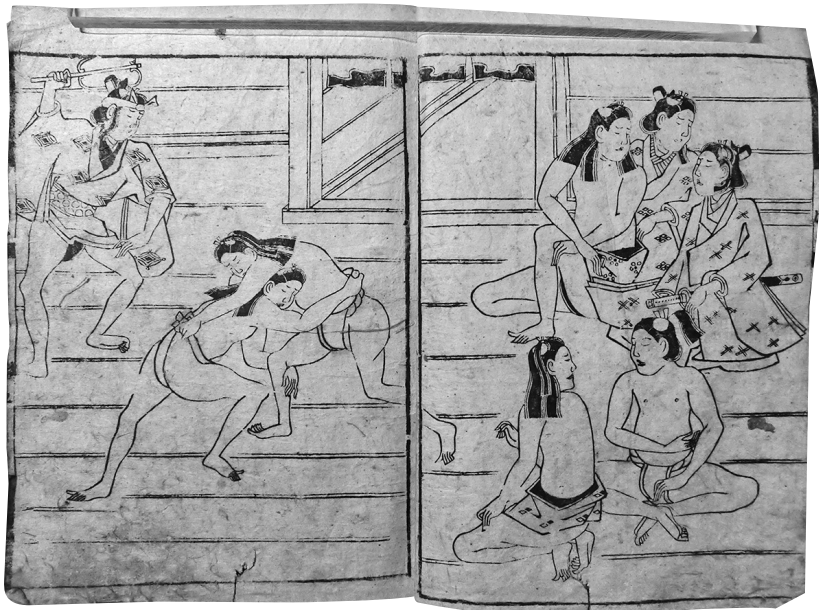
此ことよりはみな人の。ちりくゝに有事なれと。心の水のあさくゝと。かきあつめたるもしほ草。よそのみるめもはづかしき哉。

次行から『西明寺殿百首』となる。本文は割愛し挿絵箇所のみ提示する。【挿絵第六図】(十三丁ウ・十四丁オ)、【挿絵第七図】(十五丁ウ・十六丁オ)、【挿絵第八図】(十七丁ウ・十八丁オ)、【挿絵第九図】(二十丁ウ)。

(やすはらまこと 本学兼任講師)



挿絵第一図



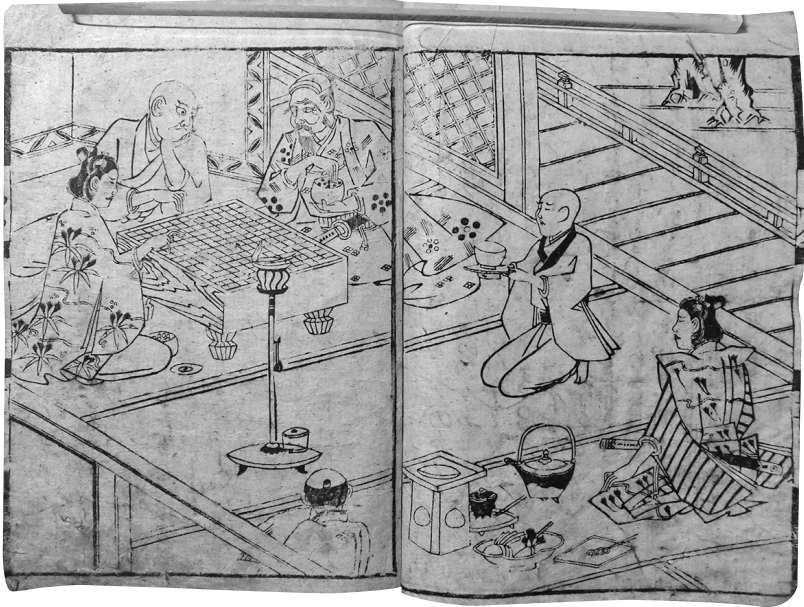
挿絵第二図



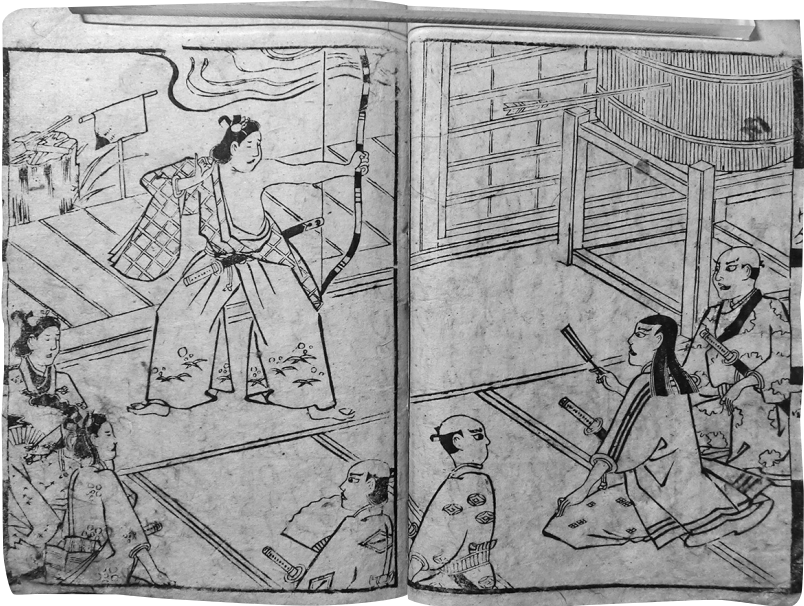
挿絵第三図



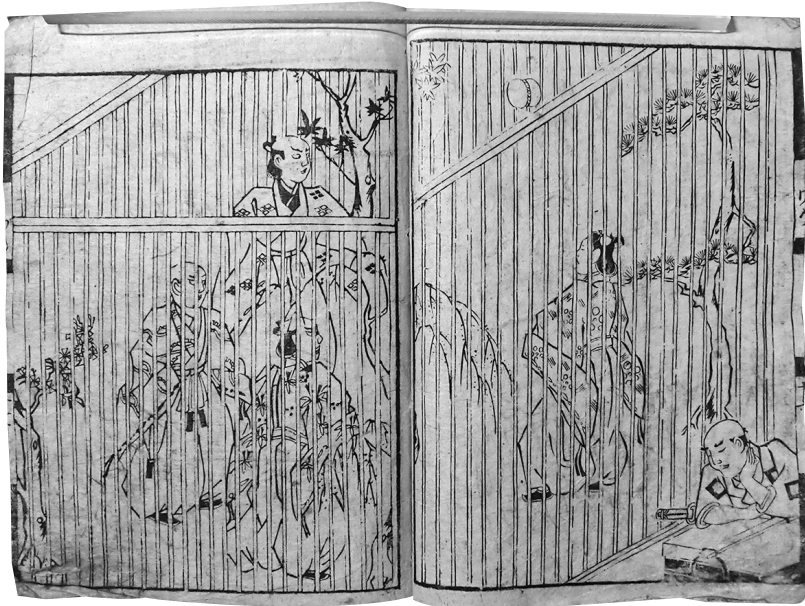
挿絵第四図



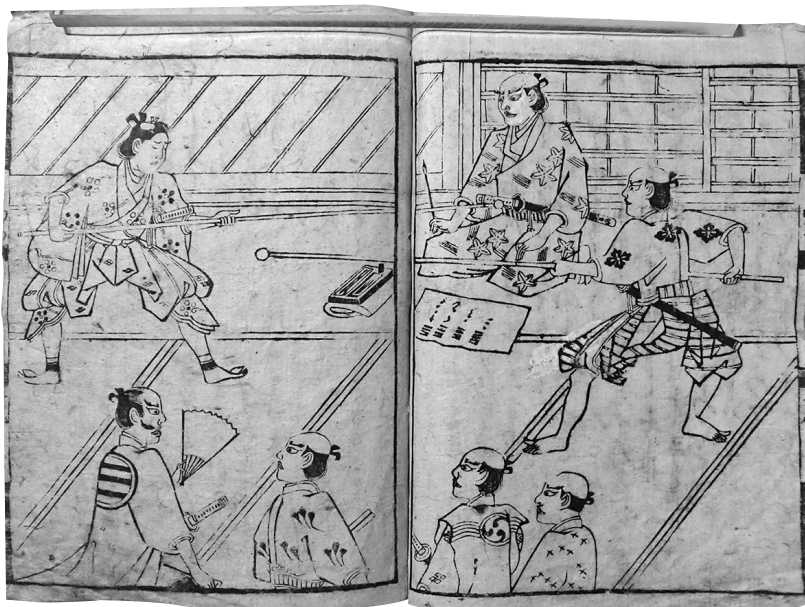
挿絵第五図



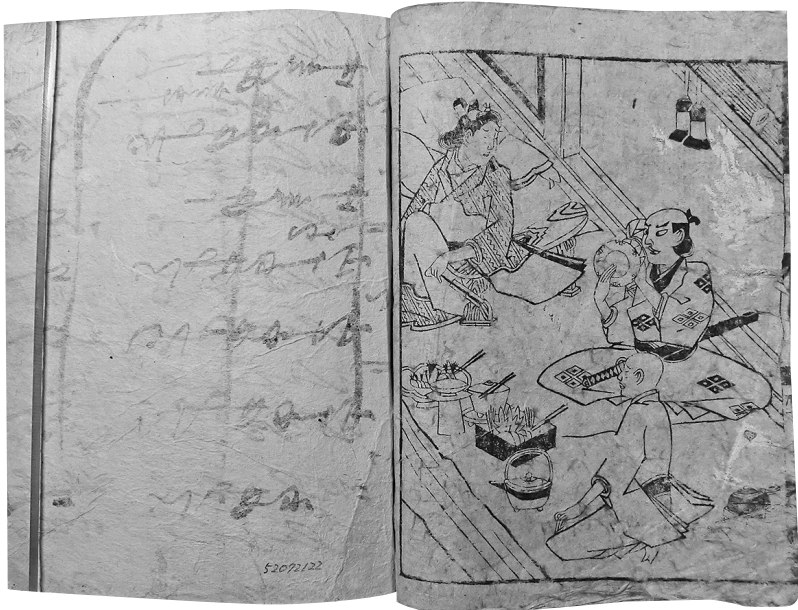
挿絵第六図



挿絵第七図



挿絵第八図



挿絵第九図